

文化財発掘Ⅷ

埋もれた古道を探る



人々の往来にとって道は欠かすことのできない存在です。都が築かれた京の地には条坊制にもとづく都市区画がなされ、東西南北、碁盤の目のように区切られた道路が造られました。この都と周辺地域との出入り口となったのが京の七口です。この七口の一つ、荒神口からは白川、山中を越えて近江坂本へと通じている交通路「白川道」が伸びています。志賀越道、山中越などと呼ばれる白川道は幕末以降、尾張藩邸ならびに第三高等学校（現・京都大学吉田キャンパス本部構内）の設置により、一部が寸断されて今に至っています。長年にわたる発掘調査の積み重ねによって、キャンパスの地下には、平安時代後期～江戸時代までの白川道が良好に残っていることが、周辺の土地利用の様相とともに明らかになってきました。

シリーズ「文化財発掘」の8回目は、発掘調査の成果から白川道の実像と白川道周辺の土地利用の様子を明らかにします。あわせて、白川道が描かれている江戸時代の絵図類や、第三高等学校がこの地に移転した際に作成された敷地実測図（明治20年制作、本学大学文書館蔵）も展覧に供します。

絵図や測量図に描かれた白川道と発掘調査による実態を結びつけて観覧していただくことで、白川道に対する知見をさらに深めていただくことを願っております。



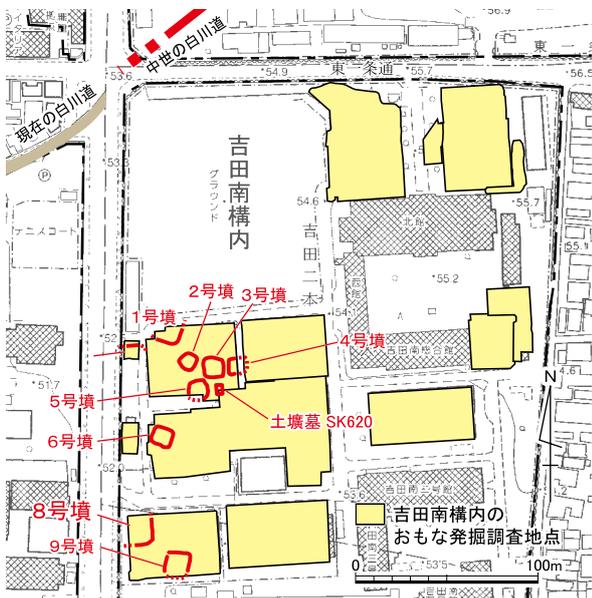
- ・本冊子は、京都大学総合博物館において、2022年3月16日～5月15日に開催する2021年度特別展『埋もれた古道を探る』（文化財発掘Ⅷ）にあわせて、展示解説として作成したものである。
- ・掲載資料と展示資料は、完全には対応していない場合がある。
- ・掲載した遺物写真は、楠木真紀子氏（写房 楠華堂）の撮影による。
- ・本文中に記した調査地点番号は、裏表紙の地点番号に対応する。
- ・執筆は、1頁を富井眞、2・3頁を伊藤淳史、ほかを千葉豊が担当し、文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門全員の協力のもとに編集した。
- ・展示および展示解説は、科学研究費補助金（基盤研究（C）「都市近郊地域歴史像の再構築—京都・白川道の研究を基盤として—」課題番号：19K01094）の成果の一部である。

1. 白川道の前史

狩猟採集社会の縄文時代の交通は、土器型式の広がりや踏まえると、川伝いも山の尾根伝いも重要だったと思われる。水稲耕作が本格化する弥生時代からは、導水として水路も開削されるなど川がより身近な存在となり、河川沿いは、開発が進んで景観の変化をとめないながら、交通路としても発達していったようである。

京都盆地東北部の代表的な河川には、雲ヶ畑方面からの賀茂川と大原方面からの高野川、そして山中越からの白川という、三川がある。賀茂川と高野川が合流した鴨川に注ぐ白川は、比叡山南麓の上流域を銀閣寺の辺りまで流れ下ってから、今は東山沿いを南流する。しかし、白川扇状地の西南部に位置する吉田キャンパスのこれまでの発掘で、白川はかつて、今の今出川通の辺りを西流し高野川に合流していたことがわかっている。

それら一連の発掘成果によれば、弥生前期にはすでに、白川流域にもそれより下流の高野川（鴨川）流域にも、水路をともなった水田が営まれていた（276・220地点）。また、大陸から馬が導入されて程ない5世紀末頃には、白川扇状地の西南縁辺に、馬や家や人物といった形象埴輪を有する方形墳（吉田二本松8号墳：378地点）を中心とした吉田二本松古墳群が展開していた（図1）。京都盆地の北部では、こうした埴輪をもつ古墳は見つかっていないことから、このロケーションの重要性、すなわち、雲ヶ畑から丹波・丹後へ、大原から若狭へ、そして山中越から近江（琵琶湖）へ、という三方面へのルートの分岐点たる交通の要衝



1 吉田二本松古墳群と白川道

だったことが知れる。

宮都で碁盤目状に道路が整備される古代になると、白川扇状地の北白川の地でも、近江への通行ルート沿いに開発が進んだ。7世紀後半（飛鳥時代）に北白川廃寺が建立され、また平安時代に入った9世紀には、北部構内の221地点で瓦や緑釉陶器の優品が出土し、貴族の別邸の存在が想定されている。そして、北部構内の297地点では、都城のある西方からこの一帯へのアクセスの一つと思われる道路が、見つかっている（図2）。

敷設は10世紀前半頃だろうが、路面が地表面より数十cmは低く、古来の道を整備したらしい。幅2.7m前後で側溝を備え、今の今出川通の北約150mを直線的に東西にはしる。東へ進めば、今の志賀越道が東山の山中に入る辺りに連なる。

古代社会では、宮都の街路と同様に側溝をもつ直線道路は、国家など権力の威厳を知らしめる視覚的効果も期待されたろう。しかしこの街道の路面は、10世紀末には埋没している。道の中央に、整備計画時には予期しなかったろう2m超の巨礫の上部が姿を現しており（図3）、車馬の交通には障害となっていたことは想像に難くない。



2 東山の山並みと直線道路（297地点、西から）



3 直線道路に突き出ている巨礫（297地点、西から）

2. 中世の白川道とその界限

道の出現と背景 京都大学本部構内の地下で、南西から北東へと斜めにはしる道の遺構が明確に確認できるようになるのは、12世紀からである。その後葉から13世紀代には、道の周辺で溝や井戸などの遺構や遺物量が急増する。おおむね鎌倉時代に相当する時期に、東国の武家政権成立を背景とした往来の増加が道の需要を高め、あわせてこの地の開発が進行した様子うかがえる。

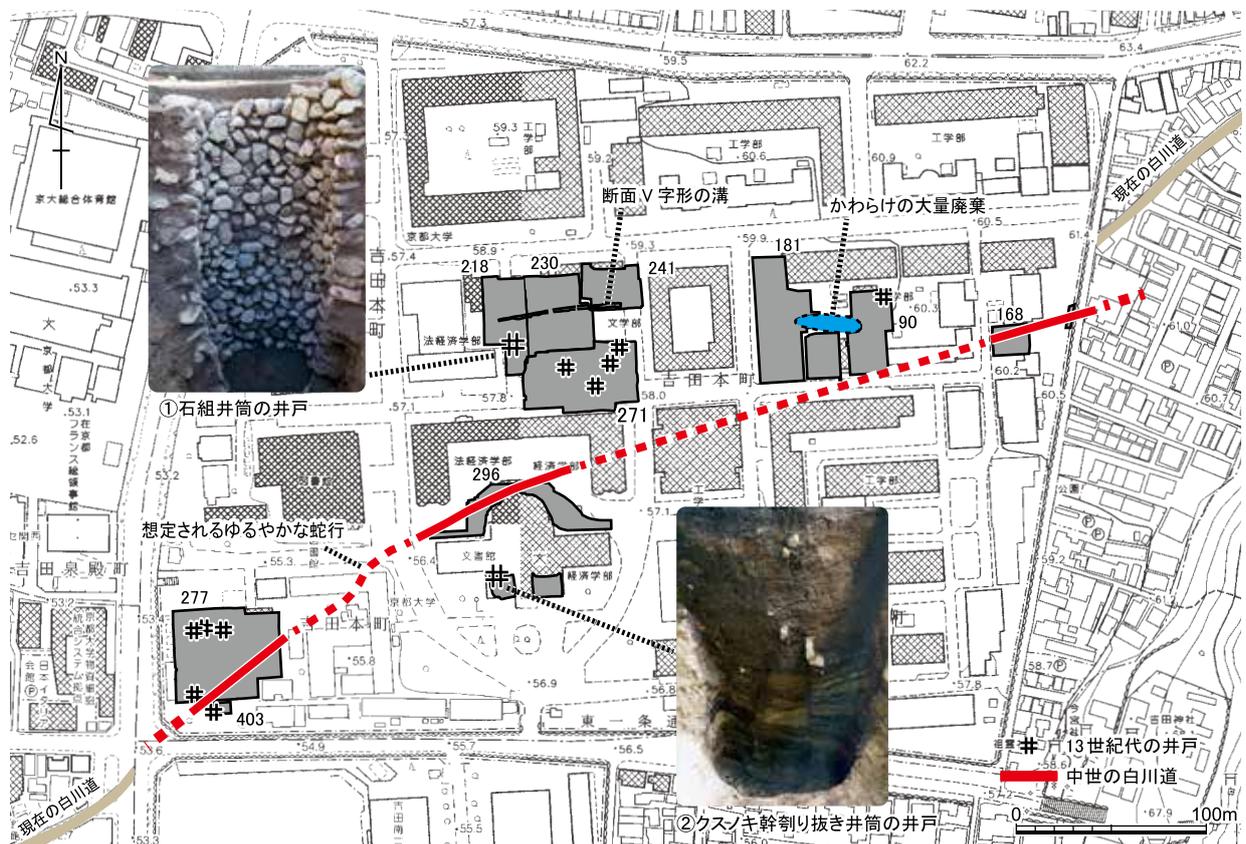
道の位置 本部構内では、西南(277)、中央(296)、東辺(168)の調査地点で中世の道路遺構が発掘され、当時のルートをおおむね復元できる(図4)。それによると、構内の東と西に残る現在の白川道を繋ぐようにまっすぐはしるのではなく、東辺は南にずれており、また西半では、現在の時計台付近を避けるようなゆるやかな蛇行が想定される。このような不自然なあり方は、微高地の迂回により勾配を緩和し、造成の省力化をはかったためと思われる、当時の地形が影響した位置どりなのであろう。なお近世には、この蛇行はさらに急なものとなっている(裏表紙参照)。

路面の特徴 こうした中世の道路は、自然の崖面をテラス状に削り出して造られている状況が確認されている。路面を構成する路盤は、粒子の



5 時計台北側での中世白川道の出土(上)と、路面の断面のようす(下)(296地点、いずれも北東から)

粗い砂を主体にしながら礫をまじえた厚さ10cm前後の堅く締まった層であり、幅3~4m程度の規模で位置を少しずつずらしながら積み重なっている(図5)。近世の路面のような深い轍の連続はみられず、細く浅い溝状の窪みがはしる程度である。また道の両側には、側溝をともなっている



4 本部構内の中世白川道と関連するおもな調査地点(数字は地点番号) 縮尺1/4000



が、形が定まらず整備されていた様子うかがえない。

周辺の遺構 構内中央の218～241地点では、道の北側100mほどの位置に、断面V字状の溝が延長70m近くにわたり確認される（図6）。道との間には、深さ6m前後に達する複数の井戸が穿たれ、道の南にも、クスノキの幹を剥り抜いた井筒を用いる特異な井戸が確認される。道をはさむ両側に、屋敷などが向き合っていたのかもしれない。この一帯が、近世に「西御館」「東御館」の小字名で呼ばれているのは、こうした中世の状況を考慮すると非常に示唆的といえよう。

活動した人々 これら吉田地域の中世遺跡を残した人々の候補としては、のちに勧修寺を家名とする公家の一族が知られている。藤原経房という公卿が正治二年（1200）に所領や屋敷を子孫に配分することを記した処分状には、「吉田南亭」「吉田園領」「吉田角家地」などの記載がみられ、その後もこの一族の財産継承にかかわる文書にたびたび「吉田」の地名が登場する。それぞれ場所の特定はできていないが、道の周辺にこうした貴族層の屋敷や仏堂などが建てられ、それにかかわる人々も道を行き交っていたに違いない。

かわらけの大量廃棄 中世の京都を特徴づける遺物として、ろくろを使わず手づくねで作られるかわらけ（土師器の皿類）があり、しばしば大量に廃棄されている。儀礼的な用途で使い捨てにされたとの理解が有力だが、確定されてはいない。道沿いの90地点では、収納用のコンテナ（60×40×15cm）に400箱以上の遺物が一度に出土し、そのほとんどがかわらけであった（図7）。こうしたかわらけは、口縁部の径の大きさや仕上げ方が時間的に変化しており、年代の手がかりとなっている。ここで大量出土しているかわらけは、大が13cm、小が9cm前後にまとまり、13世紀前葉に位置づけられる。また赤褐色の皿と、この時期から新たに出現する白色の碗を中心とした一群とで構成されている（図8）。

これらに加えて、粘土紐輪積み痕を顕著に残す独特な鉢形土器も多く出土しており、ここでは「厚手鉢形土器」と呼んでおく（図9）。中世前半期の京都の遺跡では普遍的に出土が知られるものではあるが、全形のわかる遺存の良いものがまとまって出土することは珍しい。現状では用途が確定できない製品で、解明は今後の課題である。



6 断面V字状の溝断面（241地点、東から）
上面の幅・深さ約2mの規模をはかる。



7 かわらけ（中世土師器皿）などの大量廃棄
（90地点、北西から）



8 大量に出土した赤褐色や白色のかわらけ
大皿は径13cm、小皿は径9cmにまとまる



9 粘土紐輪積み痕を残す独特な「厚手鉢形土器」
前列右端のもので口径16cm高さ12cm

3. 近世の白川道

江戸時代の白川道がはっきり認識できるようになるのは18世紀に入ってからである。そのルートは、少なくとも本部構内では中世のそれとは異なり新たに作り替えられていることを発掘調査から知ることができる。本部構内南西隅の277地点では、中世白川道の南側を通る一方で、時計台北側の296地点や構内東辺の168地点では中世白川道の北側を江戸時代の白川道は伸びている。

中世の白川道は12世紀代には出現しており、15世紀頃までの存続は確認できる。一方で、江戸時代の白川道がはっきりしてくるのは、18世紀に入ってからで、新たな道として出現している。したがって現状では、16～17世紀の白川道がどこをはっていたのか不明である。これは、江戸時代の道路がいつ作り替えられたのかという問題ともかかわってくる。道の最下層や道に付随する水路から、17世紀に遡る遺物もわずかであるが出土していることから、道の造成時期をさらに遡らせることができるかもしれないし、中世後期～近世初期の空白期の道は、江戸時代の道と同じルートに造作されたが、18世紀の普請で失われたと考えることもできる。周辺地区の新たな調査成果を得て考察を深めたい課題である。

近世白川道は、南にゆるやかに下る傾斜地を切

り通して、北側に崖面をつくって造成している。小礫や砂質土をもちいた舗装を施して路面を構築している（図11）。検出されている道幅は、調査地点や道の年代によって多少の違いがあるが、4.5～6m前後である。南側には、一段下がったところを道と並行して水路がはしっている。水路は道のすぐ南側にある場合（277地点）と、あいだに野壺の並びをはさむ場合がある（57・90・181地点、図10）。後者の3地点は隣接しており、少なくとも50m以上にわたって、道と水路のあいだに野壺が並んで存在していた景観が復原できる。野壺は、耕作に用いるため、有機肥料（肥）を収納した桶である。桶は木製から時代が新しくなると漆喰製へと変化している。白川道の周辺に耕作地が広がっていたことは、道周辺で江戸時代の耕作用の小穴や溝が見つかったことや、後で言及する「山城國吉田村古図」に描かれた田畑から明らかである。

中世の白川道と異なる近世白川道の大きな特徴は往来の激しさを物語る轍わだちの跡である（図12）。57地点の調査では9対以上の錯綜する多数の轍跡を発見した。道の両端と中央の3筋に沿って集中しており、中央の轍は往還兼用とも考えられた。轍跡の重なりを断面で詳細に観察できたのは構内南西隅277地点の調査であった（図13）。轍は大きなものでは幅70cm、深さ40cmにも達しており、こ



10 白川道と野壺・水路（57地点、南から）

斜めにはしる白い部分が白川道の路面。その下側の円形の輪郭が野壺の並びの検出状況。その南側には、平行して水路も伸びている。





11 白川道の路盤

ここまで深くなると、車輛は通行できないだろう。そのため、深くなった轍には礫や砂質土を充填し轍を修復するとともに路面全体がかさ上げされていった。図13に見られるように、幾筋もの轍が切り合いながら積み重なって、路面は最終的に約1.4mもかさ上げされた。重なり合う轍は南へと移動しているが、同じ状況は57・181地点でも確認されており、この一帯では道筋は一段低くなっている南へと徐々に移動したようである。幾重にも重なる轍の跡は、江戸時代の白川道が京と近江を結ぶ物流の動脈として、重要な意義をもっていたことを実感させてくれるだろう。

現在の道路をみてもわかるように、道にモノが落ちていることはまれである。轍の修復や路面が傷んだことから新たに路盤を作り直すような際に、陶磁器や瓦が補強材として用いられていることはあるが、これらは細かく砕けた細片となっていることが多い。このような遺物の出土が一般的な中で、181地点では注ぎ口を打ち欠いた土瓶と完形の土師器皿が見つかった（図14）。路面に穴を掘り、土瓶を納めて内面を上に向けた土師器の皿で蓋をしたものであった。75地点では、専用の胞衣壺（後産埋納容器）が道に埋められていたが、本例も日常容器を転用して、後産を埋納したものであろう。

白川道の脇から大量の遺物が見つかったのが医学部構内北東辺の298地点である。南北8m、東西は6m以上となる大規模な土坑が白川道に平行して検出された。粘土やシルトの採取を目的に白川道沿いに設けられた土取り穴である。粘土やシルトは医学部構内～病院構内東辺に堆積しており、中世後半～近世にかけて採取の対象となった。土取りの終了後は、凹地がゴミ捨て場として利用されたようで、整理箱25箱におよぶ幕末・明治初年の土師器・陶磁器類が出土している（図15）。



12 轍の刻まれた白川道（277地点、東から）



13 幾重にも重なる轍の跡（277地点、北東から）



14 胞衣壺に転用された土瓶と土師器皿（181地点）



15 白川道沿いの土取穴から出土した土師器・陶磁器（298地点）

4. 白川道の幕末

鴨川の東、鴨東と呼ばれるこの地は江戸時代、田畑の広がるのどかな農村地帯であった。この様相を一変させたのが幕末の動乱である。政治の表舞台として再び脚光をあびることになった京都には、諸藩が多数の藩士を集結させた。このため、京都に藩邸をもっていなかった藩やそれまでの京屋敷では藩士を十分に収容できなかった藩は、市中を離れて新たに藩邸を建設することになった。慶応4年刊の「改正京町御絵図細見大成」には、鴨東の地に多数の藩邸が描かれており、景観が激変した様子を見とることができる。

現在、京都大学吉田キャンパスが所在する地にも、土佐藩邸（北部構内）、尾張藩邸（本部構内）、徳島藩邸（熊野構内）が設置された。これら藩邸の所在地は絵図などから知られるほか、発掘調査でも関連する遺構・遺物が見つかっている。このなかで、尾張藩邸の建設は白川道にとって大きな出来事となった。

尾張藩は、文久3年（1863）に屋敷地を吉田村から購入して藩邸建設に着手した。複数残された屋敷図から、四周に堀を巡らし、長屋のほかに主殿や泉水、水路などを設けた藩邸であることがわかり、京都における尾張藩の拠点施設となった。

この藩邸が築かれた地は、現在の本部構内西半の地にあっており（裏表紙参照）、この藩邸の設置によって、白川道は藩邸に取り込まれ、寸断されてしまった（図16）。

幾重にも重なる轍跡からもうかがえるように、江戸時代の白川道は京と近江を結ぶ動脈であった。人とモノの往来が維持されていたなら、たとえ一画であったとしても、その往来を阻むように土地を購入し藩邸を建設できたとは考えにくい。尾張藩が白川道を含む土地を購入できたのは、この頃には交通量も減少しており、輸送路としての役割が低下していたことも考えざるを得ない。その点では、尾張藩邸の北側を画する道路である今出川通が白川道にかわって主要な往来となっていたことも想定される。

2021年の発掘調査で、藩邸の東を限る堀は絵図に描かれたように、南北一直線であったことが確かめられた。これにより、白川道をはさんで南北に伸びる道路（聖護院村道、図21）のうち、白川道より北側で今出川通とぶつかる範囲も藩邸内に取り込まれたことが明らかとなった。しかし、この道に関しては、明治20年の測量図（図17）に描かれていることから、機能を失った白川道とは異なって、藩邸内に取り込まれた後も道としての機能を維持していたと考えられる。



16 尾張藩邸の水路と白川道（277地点、北から）

水路は藩邸絵図にも描かれており、側壁を石積みで構築している。白川道を行っていた水路の水を取り込んでいる。水路の向こう側に斜めに見えるのが白川道。藩邸設置時に、盛り土がなされて機能を失った。

5. 明治時代の京都大学本部構内

大学文書館は、「山城國愛宕郡吉田村地内第三高等中学校豫定敷地實測図」の標題をもつ測量図を所蔵している（図17）。これを納める封筒から明治20年に作成されたことが知られる。横106.5cm、縦75.8cmの和紙に、道路や水路、民家、建設予定の校舎が異なる色で着色される。

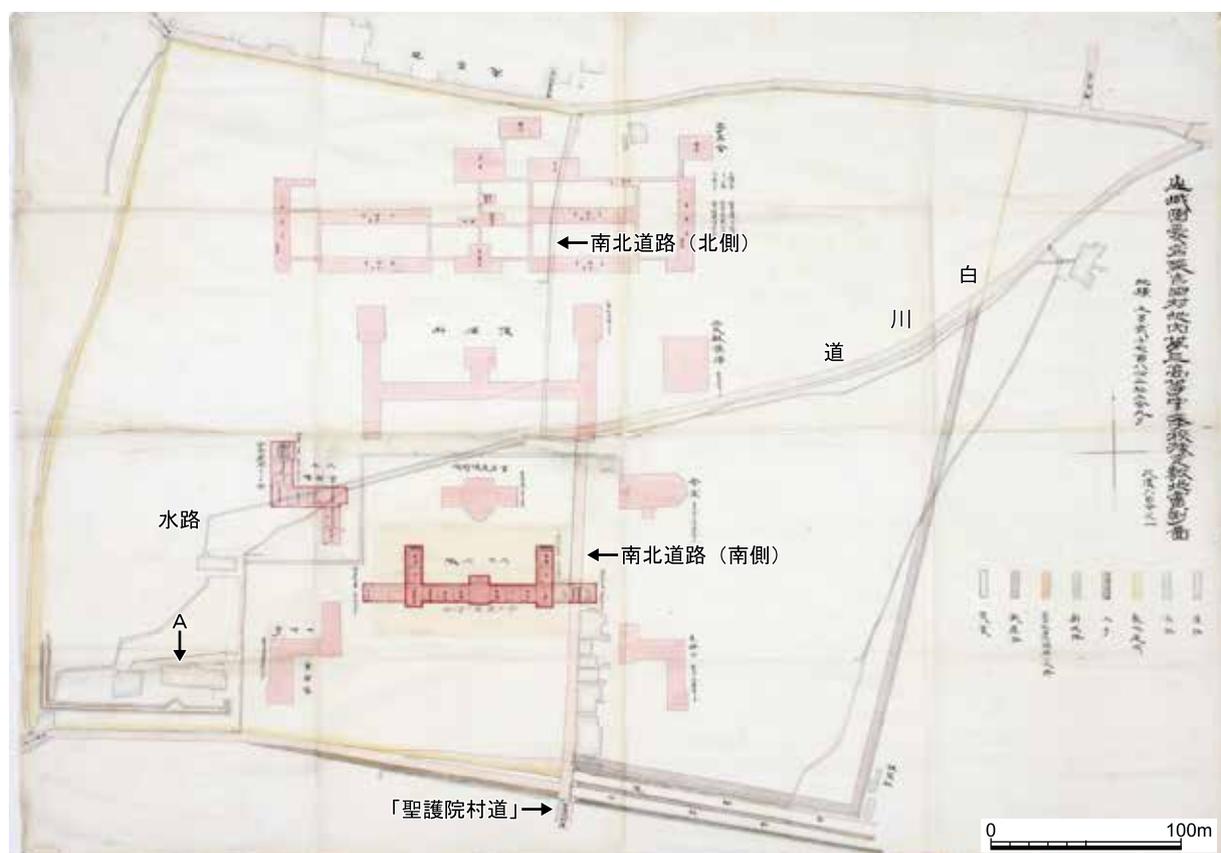
「實測図」の標題に記された第三高等中学校とは、大阪に設置された官立の教育機関で、明治19年（1886）11月に京都に移転することが決定された。吉田村が移転先となり、明治20年4月に正式な買い上げがおこなわれ、校舎が完成し大阪から京都・吉田の地へと移転が完了したのは明治22年（1889）9月のことであった。その後、第三高等中学校は明治27年（1894）の高等学校令に基づき、第三高等学校へと改組される。そして、明治30年6月、京都帝国大学が設置されると、第三高等学校の敷地と校舎は大学へと譲られ、第三高等学校は京都府の寄贈によって南側の隣接する地域（現・吉田南構内）へと移転したのであった。

この「實測図」が興味深いのは、移転地に現存していた道路や水路・民家などが克明に描かれていることである。「實測図」の東半には白川道が

みえるのに対して、尾張藩邸のあった西側では白川道が失われ水路のみが残存していること、敷地の中央を南北にはしる道（聖護院村道）があったことなどがわかる。この南北道のうち、北上して白川道にぶつかる道路のラインが尾張藩邸の東の境界となった。

国文学者の佐々政一（1872-1917）が第三高等中学校の同窓会誌（壬申会雑誌第6号）に醒雪の筆名で寄せた随筆（「過去之吉田村」）がある。幼年の記憶としているので、「實測図」よりも10年ほど前の状況を描いていると思われるが、学校敷地の西南隅の建物や中央の南北道路沿いにあった建物の数などを具体的に記述している。「實測図」に描かれた建物の数とほぼ一致しており、その記憶の正確さに驚かされる。注目すべきは、尾張藩邸の建物はほとんど取り壊されていたが、西南隅に残存する建物は藩邸に由来すると考えていることである。「實測図」には東西に長い建物（A）として描かれている。尾張藩邸を描いた屋敷図でも、この位置に東西に長い長屋を認めることができるので、佐々の推測は蓋然性が高いであろう。

藩邸設置に引き続き、学校建設という近代化の過程で、敷地内に取り込まれた白川道や聖護院村道は、その姿を消していくことになった。



17 「山城國愛宕郡吉田村地内第三高等中学校豫定敷地實測図」（大学文書館所蔵、一部加筆）
建設予定の校舎は朱色で彩色されたが、結局建設されなかった校舎や設計変更となった校舎もあった。

6. 吉田村古図の世界

近世の吉田村は、北は田中村・白川村、東は浄土寺村、南は聖護院村・岡崎村と境を接し、西は鴨川によって画されていた。享保14年（1729）段階での石高774石余りのうち、約4分の3が吉田社領であることからわかるように、吉田山西麓に鎮座する吉田社が村の中心となっていた。

近世の吉田村にどのような景観が展開していたのかは、本学総合博物館が所蔵する「山城國吉田村古図」（以下、「吉田村古図」）から知ることができる。「吉田村古図」は、田畑が一筆ごとに記され、道路や水路、畦道、土手、笹原などが彩色で描かれた村絵図（図21）である。制作年代は18世紀後葉～19世紀初頭ごろと考えられている。

「吉田村古図」をじっくりとながめてみよう。東辺は吉田山が占め、西麓には吉田社が鎮座する。その西側には社家の屋敷地が存在し、参道もみとれる。一方、領域の大半を占めているのは短冊状に区切られた耕作地であり、吉田村が都市近郊農村であったことを示している。この吉田村の村内を西の鴨川べりの荒神口から北東方向にむけて斜めに道がはしっているのが目を引く。これが白川道である。白川道の南側には接するように、ところによっては少し間隔を開けて水路が付随している。

目を村の西辺に向けると、西北隅から伸びる1本の水路が目にはいる。水路は、東へ向かって延びた後、村の西辺を南流し、白川道を横切って分流しつつ流れた後、南の聖護院村へと流れ出ている。村の西は鴨川だから、この水路は鴨川から取水していることがわかる。宝暦10年（1760）頃に制作されたとされる「賀茂川筋絵図」にはこの取水口は「吉田井口」と記されている。白川道に付随して北東方向から流れてきた水路と鴨川から取水して、西辺を南へ流れた水路が村内の灌漑用水路として主要な役割を担ったのであろう。



18 吉田本町道標

東大路と東一条通の交差点北東角に建つ。宝永6年（1709）、沢村道範によって建立された。京都市指定登録史跡

江戸時代の地誌に記述される弥勒川という川は、上に解説した吉田村の西辺を南流して聖護院村へと流れ出た水路を指すと考えている。弥勒川の名前の由来になったのが、図21では小さくて見えにくい、白川道から南へ下ったところにある堂舎である。江戸時代前期の医家であった黒川道祐は『雍州府志』という地誌の中で、現在は堂舎で地藏菩薩を祀るがかつて弥勒菩薩を安置した弥勒堂があったゆえに、ここを流れる川の名を弥勒川というとする。黒川が述べる弥勒堂が「吉田村古図」に描かれた堂舎に対比でき、この地を南流する用水路がこの堂舎にちなんで弥勒川と名付けられたのである。「吉田村古図」に描かれた堂舎の位置は、京都大学医学部構内の西辺あたりになる。ここには、近代以降の開発からまぬがれた一画が存在する。エノキの巨木がそびえたち、その根元に石地藏が配置される。この地点を弥勒堂跡地に比定する考えが提起されている。

「吉田村古図」に描かれた景観は、吉田社界限を除くと、ほとんど残っていない。それでも、先に述べた弥勒堂跡地以外にも、東大路と東一条通の交差点北東角にある道標や白川道と今出川通が交差する地点の南側および北側に安置されている石仏、あるいは「吉田村古図」に塚として記される宮内庁管理の「村上天皇皇后安子火葬塚」「醍醐天皇皇太子慶頼王墓」、往事をとどめる道筋などに、当時の面影を見ることができる。



19 弥勒堂推定地（京都大学医学部構内）



20 北白川石仏

白川道が今出川通と交差する西南側に安置される。



東

北

南

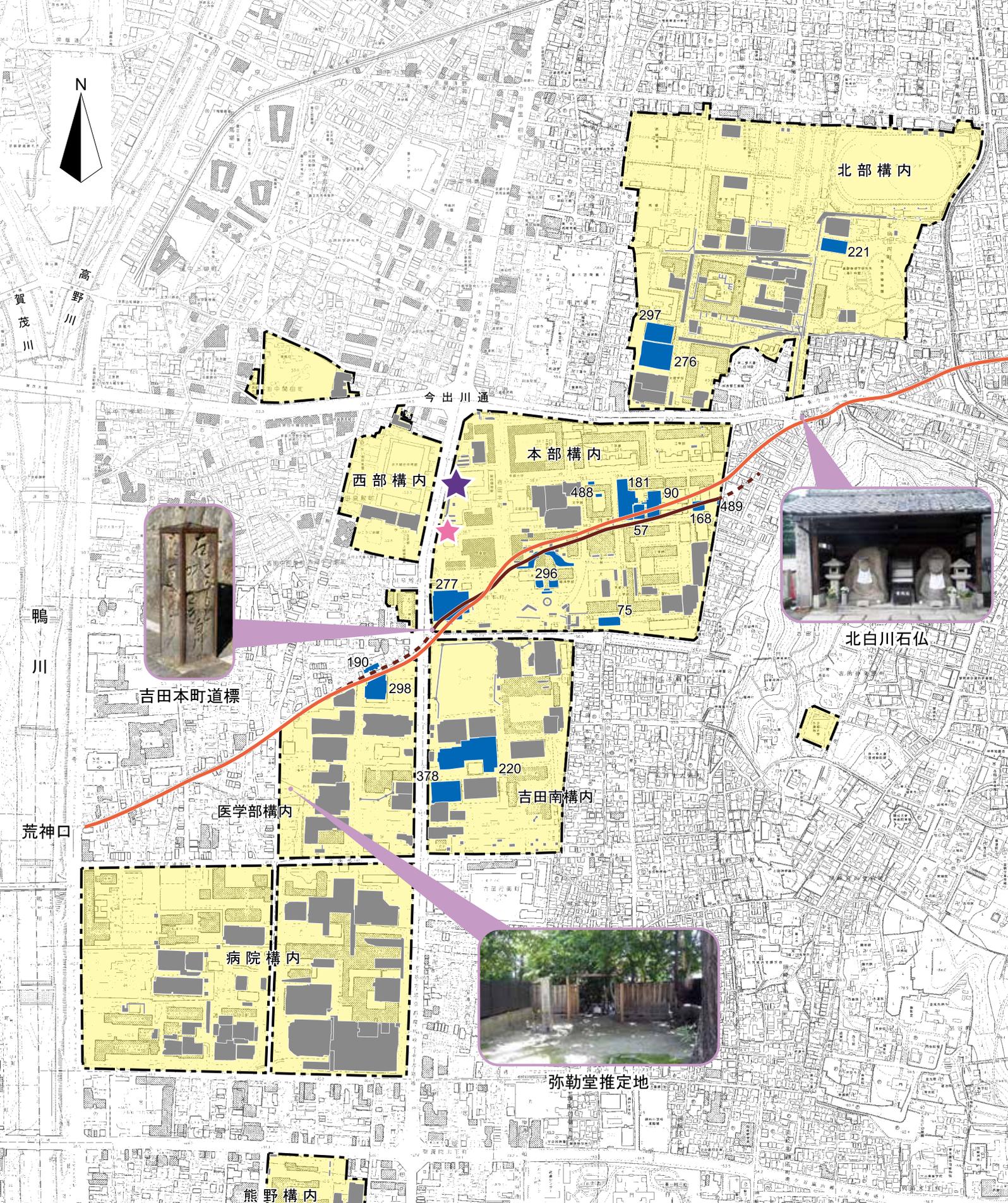
知恩寺

← 堂舎

西

21 「山城國吉田村古図」(総合博物館蔵、北は左方、175.8cm×265.0cm、一部加筆)



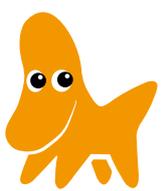


- 京都大学吉田キャンパス
- 今回の展示関連地点
- 過去の調査地点
- 京都大学総合博物館
- 尊攘堂
- 近世白川道
- 中世白川道

0 400m

京都大学総合博物館 2021年度特別展・文化財発掘Ⅷリーフレット
 埋もれた古道を探る
 2022年3月14日発行

編集・発行 京都大学大学院文学研究科
 附属文化遺産学・人文知連携センター
 〒606-8501 京都市左京区吉田本町
http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/ces-top_page/



京大文化遺産調査活用部門マスコットキャラクター きよーまくん